第５支会

１ 地域の概況

第５支会の地域は、秩父多摩甲斐国立公園の表玄関にあり、青梅市の西方に位置し、面積は20.49平方キロメートル、東は青梅地区第１支会、南は梅郷地区第４支会、北は成木地区第７支会、西は奥多摩町に接し、さらに地域の西南部は、あきる野市にも隣接している。平成22年１月１日現在の人口は3,959人、世帯数1,599世帯となっている。

本地域の前身である旧三田村は、昭和30年町村合併促進法により、吉野村、小曾木、成木村とともに青梅市に編入された。なお、当時の人口は5,486人、世帯数1,037世帯であった。

この地域は、戦前のある時代には、その上に模範村の尊称がついた。これは、当時の豊かな民政とすぐれた村政に対して授かった形容であった。その背景には、地場産業の製材業の繁栄があったが、現在、産業・経済の様相は多様化し、経済の大変化と共に往時の生彩は残念ながら、その面影を見ることができない。

交通機関は、JR青梅線が東から石神前駅、二俣尾駅、軍畑駅、沢井駅、御岳駅と４駅があり近隣市町村への通勤・通学などに利用されている。地形的には、青梅街道（国道411号線）と多摩川が平行して走り東西に細長い区域となっている。また、春は新緑、秋は紅葉がひときわ映える清流沿いに位置し、四季折々の姿を見せ山紫水明、風光明媚な自然環境に恵まれた地域となっている。

御岳地区は多摩方面から続く高い山々で、その中を多摩川が流れ、「御岳渓谷遊歩道」と呼ばれる遊歩道が整備され、格好の散策道として、今日も多くの観光客が行き交い喜ばれる山と川からなる景色の美しい地区となっている。

御岳橋付近の多摩川は、周りの岩を削り、V字谷を形成し、青梅市の名誉市民であり、文化勲章を受章した偉大な文化人である日本画家の巨匠、川合玉堂画伯がこよなく愛した渓谷でもあった。この渓谷の南側には、山村風景や人々の暮らしを描いた川合玉堂画伯の「玉堂美術館」がある。

西には御岳山（929ｍ）の雄姿があり、頂上からの眺めはすばらしく多摩川の流れ、秩父連山、遠くは都心を望むことができる。頂上にある武蔵御嶽神社は、関東一の霊山、御岳山における山岳信仰のシンボル的存在となっている。この神社のすぐ下の宝物殿には、国宝「赤糸威大鎧」など多くの貴重な文化財が展示してあり、古くから、多くの人に農耕、火難、盗難除けの神様として、近隣地域の信者や観光客が訪れている。

多摩川の北側には、高水山、岩茸石山、惣岳山からなる高水三山があり、気軽に楽しめるハイキングコースとして多くの人に知られている。

御岳地区

沢井地区に入り急流の多摩川も「寒山寺」あたりでは、ゆっくりと静かに流れている。この辺は、江戸時代には材木を集積し、「筏」を組み、青梅木材として、多摩川を下り、遠く江戸の木場まで運ばれていた。また、この地区は、深い山間から流れ出る豊富な清水を利用した酒造業も発展した。

沢井地区

二俣尾地区に入って、「横吹」付近の国道411号線から見る多摩川も美しい風景のひとつである。

本地区は、この地方に勢力を有した三田氏滅亡の地「辛垣城」の旧跡があり、また、近世には木材、石灰の生産、桃の産地として知られ、「桃」は「献上桃」として将軍家に献上されていた。三田氏の菩提寺の「海禅寺」もあるが、この海禅寺は古い歴史を持ち、中世の豪族三田氏との関わりの深い寺として、東京都の文化財に指定されている。

二俣尾地区

これらの地域一帯を鎌倉時代の頃には、「杣保」と呼ばれ、三田氏という地方豪族が治めていたことなどから、「三田村」となったと言われている。

本支会の地域は、近年、都心に近いことなどから、特に春や秋には、日帰りのレクリエーション地として、ハイキングや釣り人、カヌー競技に興じる多くの方々が訪れていただける観光地として親しまれている。

2 地域の歴史

本地域は、源頼朝が鎌倉に幕府を開き、部下の将士を地方の守護地頭に任命したといわれ、この頃に、本地方は豪族三田氏の有することとなったのではないかと想像されている。その後、永禄6年（1563）3月三田氏は北條氏のために二俣尾の辛垣城において、滅亡の悲運に陥り、八王子城主北條氏の領地となった。北條氏もまた豊臣秀吉のために滅ぼされ、本地区も徳川家康の所領となり、江戸時代300年、本村は幕府の天領（直轄地）として、代官の治下にあった。

江戸時代に入り、村といえば、二俣尾村、沢井村（上・下）、御嶽村、御嶽山（社有地）があった。これらの村々は「武州（武蔵国）多摩郡」に属し、羽村から小河内までの多摩川沿岸の55ヶ村を「三田領」と呼び、郡内の山間部を「武州杣保」とか「山の根」と称していた。

明治になってからは、「多摩」と一定し、明治12年郡を割って東西南北の西多摩郡としたが、その後、同29年に西南北のみ「三多摩」として存続された。同22年町村制が公布され、旧町村制廃合を行い、合併した町村は新規の名称を付けることになっていた。これによって、この地方は、御嶽山、御嶽村、澤井村上分同下分、二俣尾村の1山4ヶ村を併合し、始めて三田村と称し、三田氏の由緒により、この名を採って村名とした。

同25年青梅鉄道株式会社が設立され、同27年には青梅鉄道立川青梅駅間が開通した。その後、大正3年には、日向和田のトンネルが開通し青梅鉄道が日向和田まで延長され、大正のなかばには、さらに二俣尾まで延長され、雷電山の石灰石が採掘されるようになった。この頃に第1回国勢調査が行われ、三田村の人口は3,667人、世帯数は676世帯であった。

昭和の代に入り、昭和15年三田小学校が国民学校と改称、御岳小学校を分校に改め全村の学校が統一されました。同16年には、大東亜戦争勃発、区域をあげての非常事態に陥り、一般家庭においても金属の回収がはじまるなど戦時色が強まった。同19年に鉄道も御岳氷川間の奥多摩鉄道が開通し、青梅電鉄とともに国有となりました。同20年8月に太平洋戦争は終結したが、戦時に引き続いて、物資や食料が不足するなか当地区においても栄養不足から来る児童の体位、体力、発育の不良が憂慮されていた。本地区では、他村に先駆け、この食糧不足の同20年4月三田小学校（現・市立第六小学校）で、味噌汁給食を実施し、同21年4月からはミルク給食を始めた。同24年に入ると三田小学校は週4回のパン、ミルク、副食の完全給

食が実施された。同25年の国勢調査によれば、本地域の人口は5,540人、世帯数は1,081世帯であった。

同29年頃には、青梅市周辺の三田、吉野、小曾木、成木の4村にも、合併の機運が醸成され、四村共同による合併の申し出を行った。青梅市議会はこれに対し、都議会の諮問に答える形で、同年9月6日合併を可決、翌年4月1日から合併することとなった。よって、昭和30年4月1日には三田、吉野、小曾木、成木4ヶ村を包括した新青梅市が発足した。合併当時の本地域の人口は5,486人、世帯数1,037世帯であった。

同30年8月には、新たに制定された名誉市民条例によって、本区域に深いかかわりのある川合玉堂画伯が、初の名誉市民に推戴された。同33年には、御岳の多摩川畔に「玉堂美術館」が建設されることになり、同36年落成開館した。そして同年10月には、昭和天皇御夫妻の行幸啓があった。一方同36年には、当時の新庁舎の落成式が市制施行10周年記念と合わせて実施された。

昭和51年旧第五中学校跡地に市立第六小学校が新たに開設されたことに伴い、沢井の旧本校と二俣尾分校は廃止され、新第六小学校に統合された。

本市においては昭和46年以来、4次にわたる青梅市総合長期計画が策定され、それぞれの各計画にもとづき行財政計画の推進が図られるとともに、各事業が推進された時期でもあった。

平成2年10月には、同3年から同17年までの向こう15年間に及ぶ期間を見通して、作られた「第5次総合長期計画」が市議会の同意を得て成立された。翌年市制40周年を迎えるにあたり、本支会の区域に関連する項目として、「多摩川いこいとうるおいの空間の創出」、「市街化調整区域における下水道整備」など、特に推進すべき事業を上げ、計画事業が順次実施された。さらに、同14年に策定した青梅市総合長期計画基本構想に掲げた市の将来像「豊かな自然、快適なくらし、ふれあいの街　青梅」の実現に向け、さまざまな施策に対し、市と協働した取り組みを行ってきた。

同20年度からは、5年間の主要取り組みを明らかにした「第5次青梅市総合長期計画後期基本計画」が時代潮流を基本として策定され、本計画は美しい自然や景観、人と人とのふれあいのある街で、生き生きと暮らせるように施策や事業を創設し、市の発展と市民福祉の向上を図ることとして策定された。

これら市の各時代の計画策定に添い、地域特性を考慮しつつ、市と連携、協働しながら、先輩諸氏とともに役割とそれぞれの立場で、たゆまぬ自治会活動を地区住民とともに邁進してきた。また、自治行政の変化、時代潮流の中で各種諸事業は、先人たちが、歩んできた歴史を守り、穏やかで心情豊かな人間性にあふれ郷土発展のため、各事業を明らかにして、後世に続ける「明日と未来」の発展につなぐ事業を推進している。

3 支会（自治会）活動

第5支会（沢井地区の自治会）は、15自治会により組織され、平成21年4月1日現在、住民基本台帳登録世帯1,603世帯（特別養護老人ホーム分を含む）のうち自治会加入世帯は1,174世帯となっており、加入率は73.24パーセントと高い率を示している。なお、青梅市連合会平均加入率は52.14パーセントである。

支会は各自治会の活動を支援するとともに青梅市市政に対する協力、協働および自治会連合会の定める事業目的の達成の他、各種団体の事業に協賛するとともに、会員相互の親睦、融和を図り、住民の福祉向上を最優先に活動している。

本地域は地区の特性により、人口構成などに若干の違いが見受けられる。これは地理的状況から、やむを得ないことであるが、地域が小さいことにより、災害弱者と呼ばれる人たちの把握がしやすい利点もあり、昔ながらの向こう三軒両隣という近所づきあいも強い地区でもある。

今後の取り組みとしては、地域のマンパワーの発掘と自治会活動への参画こそが「地域づく

りの鍵」との認識に立ち、地域住民との円滑な関係を保ちながら活動している。折しも昨年、青梅市自治会連合会のホームページが立ち上げられた。これらの現状を踏まえ、支会においても、自治会員のIT等に詳しい人達の協力により、ホームページに自治会行事、イベントの写真などを含めた内容を内外に向け、情報発信をしている。さらに、時代潮流、地域特性（少子化・高齢社会）を踏まえ、地区住民が気軽に参加できるよう各事業（運動会）等検討委員会を設置し、必要に応じ関係者による検討と事業アンケートを採用するとともに事業評価を行いながら、次の各事業の有効的な継続を図っている。

研修視察については、現在、地域が抱えている災害時の対応と課題を含めての研修先を決定している。平成20年度研修については、地震等の災害に対する地域初動対応などのあり方の一助として、平成16年10月23日に発生し、新潟県中越地震で甚大な被害を受け、なお、現在も復興に努めている旧山古志村（地震被災の保存地および長岡市地域復興支援センター山古志サテライト）を視察研修地とした。また、21年度の研修については、隔年で支会と体育振興会の合同研修であることから、市施設の有料化、地産地消のあり方を考慮した研修視察先として、総合型地域スポーツクラブ（NPO法人調和SHC倶楽部）および日本三大朝市のひとつである「勝浦朝市」を視察した。

会員の多くは「三田っ子」といわれ、三田に生まれ育った人達が比較的多い地区であり、若い人達が、先輩諸氏の助言を受け、尊敬しながら何事も進めることを前提とした活動を行っている。また、今後の本支会の活動の視点として、コミュニティー（地域社会）は、ここに住む人々自らの意思で育てるものであり、地域特性を生かし、いろいろな団体、人と人との暖かい交流が盛んに行われ、少子化・高齢社会に対応するための自治会活動と組織の充実を図り、全ての地域住民に参加の機会を与え、「三田」らしさを展開して行く事としている。

4 各種団体と事業

(1) 三田地区体育振興会

地域内の体育振興に関する事業を行うため、昭和49年に本会を設置した。

本会は、地区住民のため、体育振興活動を行い、体力の増進と住民福祉の向上に寄与することを目的に、体育振興の指導・普及、体育行事の開催およびスポーツ行事の参加、スポーツ団体の育成・指導、市および関係諸団体等との協調・提携、その他、必要な事業に取り組んでいる。役員は、会長（支会長）を含め各地区自治会長、関係団体、地区体育部長、運営委員からなる53名で構成されている。

主な事業として、5月・6月の男女ビーチボール大会、10月の地区運動会、ソフトボール大会、3月の市民ハイキングを実施している。

なお、各事業実施の後には、実施内容の再検討を行い、多くの住民の参加を得ることを主眼に次につなげる適切な事業内容の検討に取り組んでいる。

(2) 三田地区自主防災対策委員会

本委員会は、災害時に対応する体制を整備するとともに、地区住民の防災意識の高揚を図る事を目的に、自らの地区を守り、地域の安全・安心の確保を図るとの認識のもとに、昭和56年に設立された。

主な事業としては、地区内における総合的な防災計画を作成すること、災害時に災害対策本部を設置すること、地域住民を対象とした防災意識の普及と活動および防災訓練を実施すること、その他目的達成に必要な事項を定めている。

本委員会の会長は支会長、副会長は同副支会長、支部長は各自治会長などで組織され、各種関係機関を含め48名で構成され活動をしている。

事業として、8月三田地区自主防災訓練を市立第六小学校グランドで、青梅消防署および青梅消防署日向和田出張所、消防団、女性防火防犯の会、市立第六小学校PTA等多くの関係諸団体と協働実施している。

また、平成21年10月には台風18号の来襲に伴い、自主防災対策会議を設置し、情報収集と地区の安全確保対策について協議した。平成22年3月には、三田地区自主防災対策委員会の研修視察として、防災意識の向上を目的に、東京消防庁立川都民防災教育センターを視察先として決定、災害時に役立つ訓練を継続して受講するなどの取り組みを行っている。

(3) 三田地区を見守る会

地域の安全・安心は地域からを合言葉に、防犯体制の整備、防犯意識の高揚を図ることを目的に、地域住民を対象とした防犯意識の普及活動を行い、目的達成に必要な事業に取り組んでいる。

本会は、自治会長15名と市立第六小学校PTA会長などで組織され、地区住民の協力を得て、地域の安全・安心の確保に向けた活動に努めている。

(4) 青少年対策三田地区委員会

本会は、地区青少年問題の重要性を考慮しながら、地域社会力を結集し、地域における青少年の健全な育成を図ることを目的に昭和50年発足した。この目的達成のための事業として、青少年の健全育成にかかわる団体および行政機関の活動相互の調整、地域における問題点の発見と対応などに取り組んでいる。

主な支援活動として、小学校高学年を対象としたジュニア・キャンプ、青少年の音楽祭としてサウンドガレージ事業を展開し、青少年の健全育成を実施している。